

# わたしが出会った尹東柱の詩とキリスト教信仰

日本聖公会 司祭 ヨハネ 井田 泉

2023/10/15 大韓聖公会 ソウル主教座聖堂

## 1. 初めに——尹東柱の詩と出会った頃

わたしが尹東柱とその詩に出会ったのは、1986年の6月、今から37年前のことです。当時、わたしは満36歳でした。今わたしは満73歳なので、ちょうど人生の半ばで出会ったこととなります。それ以来、彼はわたしにとって大切な存在であり続けてきました。

彼の詩と出会った1986年とその前後はどういう時代だったかを少しお話しします。

その2年前、大韓聖公会と日本聖公会の公式的な交流が始まりました。1984年の第1回日韓聖公会宣教セミナーです（ソウル）。その年、尹東柱詩集の日本語訳『空と風と星と詩』が出版されました。その次の年1985年、わたしは立教大学を退職し、聖公会神学院の専任教員となりました。その年の秋、第2回日韓聖公会宣教セミナーが大阪で開かれました。わたしは日本側の準備委員のひとりでした。その時のテーマは「わたしは主に罪を犯しました（サムエル下12:13）——両国聖公会の歴史をかえりみて」でした。その時日本側は植民地支配の責任を感じて非常に緊張し、ろくに発言できなかったことを記憶しています。

1984 第1回 日韓聖公会宣教セミナー（ソウル）

\*日本語訳『空と風と星と詩』刊行

1985 第2回 日韓聖公会宣教セミナー（大阪）

\*井田、立教大学を退職、聖公会神学院専任教員となる

1986 日本聖公会総会、祈祷書から「天皇のための祈り」等を削除決議

\*6訳書『空と風と星と詩』購入、原文『하늘과 바람과 별과 시』購入

8 東京・ソウル教区 青年交流協議会に参加（聖書研究を担当）

1987 3 聖公会神学院 韓国研修

6.10 民主憲法争取国民大会（ソウル主教座聖堂） 6.29 民主化宣言

7 大韓聖公会司祭団 聖域守護のための断食祈祷

その次の年1986年、日本聖公会総会は、祈祷書から「天皇のための祈り」を削除する決議を行いました。わたしはそのために運動した者のひとりです。わたしが尹東柱の日本語訳詩集を購入したのはその直後の6月でした。それからおよそ10日後、ソウルの教保文庫で韓国語の原詩集を手に入れました。これが尹東柱との最初の出会いです。

2ヵ月後の8月、東京教区・ソウル教区青年交流協議会が韓国で開かれて、わたしは聖書研究担当者として参加し、青年たちと1週間、学びと生活を共にしました。その時、出会ったのが、

韓国側指導聖職、金根祥神父様（当時）と李定九副祭様（当時）でした。

翌年 1987 年 2 月から 3 月にかけて、聖公会神学院（日本）の全学生は 2 週間の韓国研修旅行をしました。わたしが団長でした。大韓聖公会の方々にはほんとうにたくさんのお世話になりました。

この年、韓国では民主憲法争取国民運動本部が運動を展開しており、6 月 10 日の国民大会の会場にはこのソウル主教座聖堂が提供されたと聞いています。この主教座聖堂の境内にある「6 月民主抗争震源地」（6 월 민주항쟁 진원지）の碑を案内していただいたことがあります。

「6.29 民主化宣言」。しかしその直後の 7 月には機動隊（戦闘警察）が主教座聖堂に乱入したため、大韓聖公会司祭団は約 1 週間にわたって「聖域守護のための断食祈祷」を行われました。その時に発行された「断食速報」「ソウル教区共同週報」などの資料をわたしはある秘密ルートを通して入手し、それらを全訳して、日本聖公会日韓協働委員会から日本聖公会の全教会に配布しました。

わたしが尹東柱と出会ったのは、こうした厳しい時代でした。彼の詩は、今お話しした時代の空気とともにわたしの中に入ってきたのでした。

・尹東柱は 1917.12.30 中国・吉林省北間島明東（現在は延辺朝鮮族自治州）に生まれる  
明東～龍井～平壤～ソウル（当時、京城）～東京（立教）～京都（同志社）～福岡  
1943.7.14 逮捕 治安維持法違反で懲役 2 年の判決  
1945.2.16 福岡刑務所で獄死（満 27 歳）

尹東柱は 1917 年 12 月 30 日、中国・吉林省北間島明東（現在は延辺朝鮮族自治州）で生まれました。家族親戚は皆クリスチャンであり、尹東柱も生後まもなく幼児洗礼を受けました。彼はソウルの延禧専門学校で学んだ後、1942 年に日本に渡り、4 月には東京の立教大学（聖公会）文学部英文科に留学しました。立教は聖公会の学校です。彼は個人的に聖公会の司祭と相談することもあったと知られています。しかし 10 月には京都の同志社大学に移りました。

翌 1943 年 7 月、治安維持法違反容疑で逮捕され、そして解放の半年前、1945 年 2 月 16 日、福岡刑務所で獄死しました。満 27 歳でした。

尹東柱の美しく清らかな詩に触れ、そして彼の獄死を知ったとき、その年齢に衝撃を受けました。というのは、その同じ満 27 歳でわたしは神学校を卒業して教会で働き始めたからです。彼が生涯を閉じたその年齢が、わたしが働き始めた年齢だ。何とも言えない申し訳なさを感じました。彼を死に至らせた同じ日本人としての負い目と責任を、わたしは特にその年齢に感じたのです。

それと同時に、わたしには尹東柱と共通するものがいくつかあることに気づきました。

第1に立教大学です。わたしは神学校を出て京都の教会で5年働いた後、立教大学文学部キリスト教学科の助手を3年間勤めました。英文学科は隣にあり、しばしば行き来しました。彼が祈った立教大学の礼拝堂でわたしも礼拝しました。ただ残念なことに、わたしが尹東柱を知ったのは立教大学を退職した次の年だったのです。

第2は同志社大学です。彼は京都に住み、同志社大学に通っていました。わたしは大阪外国語大学朝鮮語学科を卒業した後、同志社大学大学院神学研究科で3年間を過ごしました。彼が風を感じながら歩いた同志社の今出川キャンパスを、30年後にわたしも歩いていたのです。わたしが司祭按手を受け、また結婚式を挙げた京都の主教座、聖アグネス教会は、同志社から歩いて10分です。きっと尹東柱は、アグネス教会に来たことがあったに違いありません。

第3はデンマークのキリスト教思想家キルケゴールです。尹東柱は延禧専門学校時代の後期にキルケゴールを耽読していたと伝えられます。わたしも大学3年生から4年生にかけて、見失った神さまを必死で求める思いで、キルケゴールを耽読していたのです。キルケゴールは22歳の時に日記にこう書いています。

「根本的なことは、私にとって真理であるような真理を見出すことである。そのためなら私がいつでも生きかつ死ぬことができるようなその理念を見出すことである。いわゆる客観的な真理などを発見したところで、それが私にとって何の役にたつというのだろうか」

同じ22歳の頃、これがわたしにとって切実な事柄でしたが、同じ20代前半の尹東柱にとってもこれが切実な事柄だったのではないかと想像します。

立教大学、同志社大学、そしてキルケゴール。この三つの重なりから、わたしは尹東柱との間に特別なつながり、因縁を感じてきました。

「死ぬ日まで天を仰ぎ 一点の恥なきことを」

「죽는 날까지 하늘을 우러러 한점 부끄럼이 없기를」

尹東柱とその詩に真実の光を見ます。自分の命をかけて真実に生きようとした人の光です。そのような光を放つ彼を、わたしは裏切ることができない。そういう思いをずっと抱いてきました。このことは、わたしが日本聖公会の戦争責任・植民地支配協力責任の問題に取り組むことを促すものでもありました。

## 2. 「序詩」(1941)とイエスの祈り

今日は尹東柱の詩の中から二つを取り上げて、聖書との関連を見つめたい。より積極的に言えば、その詩に映るイエスさまの姿、イエスさまの祈り、イエスさまの歩みを探してみたいと思います。とって、必ずそのように詩を読まなければならないということではありません。詩は自

由な読みを、自由な感じ方を促すものであって、正しい一つの読み方があるわけではないのです。ただイエスさまを信じる者として、同じくイエスさまを信じて生きた尹東柱の詩を、こんなふうにも読めるのではないか、というわたしのささやかな試みです。

(1) 「天を仰ぎ」 하늘을 우러러

서시

죽는 날까지 하늘을 우러러  
한점 부끄럼이 없기를,  
잎새에 이는 바람에도  
나는 괴로워했다.  
별을 노래하는 마음으로  
모든 죽어가는 것을 사랑해야지  
그리고 나한테 주어진 길을  
걸어가야겠다.

序詩

死ぬ日まで天を仰ぎ  
一点の恥なきことを、  
木の葉に起こる風にも  
わたしは苦しんだ。  
星をうたう心で  
すべての死んでゆくものを愛さなければ  
そしてわたしに与えられた道を  
歩みゆかねば。

오늘밤에도 별이 바람에 스치운다.

今夜も 星が 風にさらされる。

「死ぬ日まで天を仰ぎ」 죽는 날까지 하늘을 우러러

「序詩」の冒頭です。尹東柱は天を仰ぎ、思いを巡らし、自分の決意を言葉にします。

「하늘」(天)は、主の祈りの「天におられるわたしたちの父よ」하늘에 계신 우리 아버지 の天 하늘 です。

「天を仰ぎ」 하늘을 우러러 あるとき気がつきました。これはイエスさまの姿と同じだ、と。福音書にはイエスが天を仰がれたことが記されています。具体的に確かめてみましょう。

まずマルコによる福音書第6章41節。5つのパンと2匹の魚の話。大勢の群衆を前にイエスが天を仰いでこれを祝福される場面です。

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。」

「예수께서는 빵 다섯 개와 물고기 두 마리를 손에 드시고 하늘을 우러러 감사의 기도를 드리신 다음, 빵을 떼어 제자들에게 주시며 군중들에게 나누어주라고 하셨다. 사람들은

모두 배불리 먹었다.」

天を仰ぐ尹東柱と、天を仰がれるイエスの姿が重なります。

二つ目の例はマルコ福音書 7 章 33 節からです。耳が聞こえず口が利けない人にイエスが出会われたとき、イエスは天を仰いで嘆息されました。

「そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッフアタ』と言われた。これは、『開け』という意味である。」

「예수께서는 그 사람을 군중 사이에서 따로 불러내어 손가락을 그의 귓속에 넣으셨다가 침을 발라 그의 혀에 대시고 하늘을 우러러 한숨을 내쉬 다음 “에파타.” 하고 말씀하셨다. ‘열려라.’ 라는 뜻이었다.」

重い困難を負った人と出会ったとき、イエスはその人に深く共感すると同時に、その人を何とかしてあげたいと切に願われました。その思いを神に向けて、天を仰いで嘆息されました。

困難を負った人への共感が、尹東柱にもあつたに違いありません。

三つ目の例は、ヨハネ福音書 17 章 1 節です。最後の晩餐におけるイエスの祈りです。ヨハネ福音書では、イエスの弟子たちに対する告別の言葉が長く続きます。語っても語っても限界がある。あとはもう祈るしかありません。

「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。『父よ、時が来ました。』」

「이 말씀을 마치시고 예수께서는 하늘을 우러러보시며 이렇게 말씀하셨다. “아버지, 때가 왔습니다. ”」

語る言葉が尽きたときの祈り、死を前にしてのイエスの祈りの姿です。

「天を仰いで」「하늘을 우러러」。

イエスは生涯、数限りなく天を仰いで祈られたでしょう。それは切実な祈りであり、同時に人々への愛と切り離せないものでした。尹東柱はそのようなイエスを何度も思っていたでしょう。イエスの祈りがこの詩に反響しています。イエスの祈りが、尹東柱の心と体に宿っているように感じます。尹東柱の中で、イエスさまが呼吸しておられるように思うのです。

(2) 「わたしに与えられた道を 歩みゆかねば」 나한테 주어진 길을 걸어가야겠다.

「序詩」のもう一箇所注目してみましょう。

「わたしに与えられた道を 歩みゆかねば」 나한테 주어진 길을 걸어가야겠다.

イエスに迫害の危険の迫る中でのことです。ルカ福音書 13 章 31 節から読んでみます。

「ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。』イエスは言われた。『行って、あの狐に、“今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える”とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。』」

「바로 그 때에 몇몇 바리사이파 사람들이 예수께 가까이 와서 “어서 이 곳을 떠나시오. 헤로데가 당신을 죽이려고 합니다.” 하고 말하자 예수께서는 “그 여우에게 가서 ‘오늘과 내일은 내가 마귀를 쫓아내며 병을 고쳐주고 사흘째 되는 날이면 내 일을 마친다.’ 하고 전하여라. 오늘도 내일도 그 다음날도 계속해서 내 길을 가야 한다. 예언자가 예루살렘 아닌 다른 곳에서야 죽을 수 있겠느냐?” 하고 말씀하셨다.」

イエスは自分の死をすでに覚悟しておられました。自分の身の安全を守る道を選ぶのではなく、「自分の道を進まねばならない」내 길을 가야 한다。神が召された道を、ご自分の使命の道を歩まなければならない。同じように、尹東柱も自己保身の道ではなく、損得の道ではなく、「わたしに与えられた道を 歩みゆかねば」나한테 주어진 길을 걸어가야겠다 と決意していた。「死ぬ日まで天を仰ぎ」「죽는 날까지 하늘을 우러러」天を仰ぎつつ、死ぬ日まで、自分の使命の道を歩むことを彼は決意したのです。すでに彼は自分の 3 年 3 ヶ月後の死を予見、覚悟していたかのようです。

この「序詩」は尹東柱の生涯の願いと祈りと決意を表すものですが、それはイエスさまと深く通じていると感じます。

### 3. 尹東柱とキリスト教信仰

ここで尹東柱がクリスチャンであったこと、彼が真実な信仰者であったことに一言触れておきましょう。尹東柱の弟、尹一柱氏が、兄の追憶を書かれた文があります。わたしはこれを『日韓キリスト教関係史資料』第 3 卷（新教出版社、2020）の編集をしていたときに発見したのですが、長老派（예수교장로회）の機関紙『基督公報』1965 年 2 月 20 日号に掲載されたもので、タイトルは「兄 尹東柱——彼の 20 周忌に」です。その一部を紹介します。

「中学時代には日曜学校の教師の仕事も熱心にし、専門学校初級学年のときは休暇で帰郷すると夏期聖書学校のことも興味を持って行いました。専門学校後半には信仰に多少の懐疑を感じたような時もありました。卒業する頃にはキルケゴールを愛読し、彼の友人であった M 牧師との対話で神学にも深い造詣を示し、また信仰から離れていなかったことを示したといえます。今も忘れられないのは、ある冬休みのクリスマスの日、寒い夜明けに私の手を引いて教会に出席し、敬虔な雰囲気浸って帰る彼の姿です」。

「彼が 1944 年に日本の福岡刑務所に収監されていくらもならないころ、英韓対照新約聖書を送ってほしいと言うので送ってあげたことがあります」。

獄中から彼は、聖書を送ってほしいと家族に頼みました。『基督公報』では「英韓対照新約聖書」となっているのですが、韓国で発行されている尹東柱の評伝では「英和対照新約聖書」となっています。いずれが正しいのか、わたしはまだ確認できていません。その問題は今は置くとして、日本の福岡刑務所の独房で彼が聖書を読んでいたことを、痛切に感じるのです。

#### 4. 「新しい道」(1938) とイエスの歩み

### 새로운 길

내를 건너서 숲으로  
고개를 넘어서 마을로

어제도 가고 오늘도 갈  
나의 길 새로운 길

민들레가 피고 까치가 날고  
아가씨가 지나고 바람이 일고

나의 길은 언제나 새로운 길  
오늘도…… 내일도……

내를 건너서 숲으로  
고개를 넘어서 마을로

### 新しい道

川をわたって森へ  
峠を越えて村へ

昨日も行き、今日も行く  
わたしの道、新しい道

タンポポが咲き、かささが飛び  
娘が通り、風が起こり

わたしの道はいつも新しい道  
今日も……明日も……

川をわたって森へ  
峠を越えて村へ

この詩は明るい、希望に満ちた詩です。彼が延禧専門学校に入学してまもない頃のもの(1938.5)で、「序詩」より3年半前の作品です。当時彼は満20歳。後にこの「新しい道」は、彼の故郷・龍井での葬儀の際に、「自画像」とともに朗読されたとのこと。

「新しい道」を読んでもみると、「序詩」と共通した言葉があるのに気づきます。「道」길、「風」바람、「(風が)起こる」일다です。

ところでドイツの神学者ボンヘッファーは「詩編の中でイエスが祈っておられる」と言いましたが、わたしは「尹東柱の『新しい道』の中でイエスが歌っておられる」と想像するのです。ここでは二箇所に限って、詩の言葉からイエスさまの言葉と姿を連想してみます。

(1) 「風が起こり」 바람이 일고

福音書にほとんど同じ表現があります。マルコ福音書4章37節。ガリラヤ湖の激しい風です。

「激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。」

「그런데 마침 거센 바람이 일더니 물결이 배 안으로 들어쳐서 물이 배에 거의 가득 차게 되었다.」

ところで、「風」は時代の悪しき風を思わせます。「序詩」の最後にこうありました。

「今夜も 星が 風にさらされる」 오늘밤에도 별이 바람에 스치운다

これは日本帝国主義の邪悪な圧迫、弾圧ともとれます。

けれども詩の言葉は多義的かもしれません。風はもう一方で、「聖霊」の風を思わせます。神からの促しや励ましです。ここでヨハネ福音書の中のイエスの言葉を思います。3章8節です。

「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

「바람은 제가 불고 싶은 대로 분다. 너는 그 소리를 듣고도 어디서 불어와서 어디로 가는지 모른다. 성령으로 난 사람은 누구든지 이와 마찬가지로.」

ここで「風」바람と訳された言葉は、ギリシア語原文では「プネウマ」(霊)です。神の霊が、神からの風が吹いて尹東柱を圧迫する。促す。あるいは励ます。

「序詩」にはこう言われていました。

「木の葉に起こる風にも」 잎새에 이는 바람에도

ここにもわたしは聖霊の風を感じます。

「新しい道」の「風が起こり」 바람이 일고 は、直接には聖霊の風とは言えません。けれども、道を歩いていく尹東柱の前に、後ろに、傍らに起こる風。それは、自然の風であるとともに、この世界の風、また神からの風でもあったという気がするのです。

「タンポポが咲き かささが飛び」 민들레가 피고 까치가 날고

「娘が通り 風が起こり」 아가씨가 지나고 바람이 일고

平和で明るい情景が思い浮かびます。しかし日本の悪しき風は彼を苦しめ、また神さまからの風は彼を促します。

(2) 「峠を越えて村へ」 고개를 넘어서 마을로

「川をわたって森へ」 「내를 건너서 숲으로

峠を越えて村へ」 고개를 넘어서 마을로」

イエスの生活は旅の生活でした。イエスは村から村へと巡られました。村ではさまざまな人と



出会われました。ルカ福音書 4 章 31 節にはこう記されています。

「イエスはガリラヤの町カファルナウムに下って、安息日には人々を教えておられた。」

「그 뒤 예수께서는 갈릴래아의 마을 가파르나움으로 내려가셨다.」

またイエスはベタニアの村では、マルタ、マリア、ラザロと出会われました。ルカ 10 章 38 節です。

「一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。」

「예수의 일행이 여행하다가 어떤 마을에 들었는데 마르타라는 여자가 자기 집에 예수를 모셔 들였다.」

イエスは村でさまざまな人と出会い、歩みを進めて行かれました。「新しい道」の詩から、イエスの道と旅と出会いが想起されます。

わたしの道はいつも新しい道      나의 길은 언제나 새로운 길  
今日も……明日も……      오늘도…… 내일도 ……

先ほど引用したルカ福音書 13 章 33 節に「わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」というイエスの言葉がありました。

わたしたちの生活は単なる繰り返しではありません。信仰の歩みは、神によって日ごとに新しくされるのです。わたしたちの道も日ごとに新しい道です。

「新しい道」は、神からの温かな光、希望を感じさせ、日ごとに新しくわたしたちを未来に向けて歩ませる詩です。

## 5. 終わりに

尹東柱を記念して、日本では東京、福岡、京都で集まりが継続的に持たれています。わたしが関係しているのは、京都の同志社のコリアクラブと尹東柱を偲ぶ会が共催している「尹東柱詩碑献花式」です。詩碑は同志社大学キャンパスの礼拝堂の東側にあります。いつもだれかが花束を献げています。毎年、彼の逝去記念日である 2 月 16 日に近い土曜日の午後に、詩碑の前で聖書朗読と祈りを含む献花式を行い、その後に講演会などを行っています。

この詩碑が建立されたのは 1995 年です。この建立の際、実務の中心を担ったのはわたしの高校時代の同級生で朴熙均氏という在日韓国人です。建立に至る協議過程の話ですが、南も北も、在日も日本人も一緒に心を合わせて記念できるのは何かと考えて、尹東柱詩碑と決まったそうです。

2 月になると、わたしの中で尹東柱がわたしの中で呼吸するような気がします。

尹東柱詩人を追悼する美しい歌があります。尹東柱のまたいとこ (육촌 동생) である音楽家、尹亨柱氏が作詞作曲した「尹東柱さまにささげる歌」윤동주님께 바치는 노래 です。「序詩」の

中の言葉が取り入れられています。

당신의 하늘은 무슨 빛이었길래  
당신의 바람은 어디로 불었길래

당신의 별들은 무엇을 말했길래  
당신의 시들이 이토록 숨을 쉬나요

밤새워 고통으로 새벽을 맞으며  
그리움에 멎든 바람 고향으로 달려갈 때

당신은 먼 하늘 차디찬 냉기 속에  
당신의 숨결을 거두어야 했나요...

죽어가는 모든 것을 사랑했던 당신은  
차라리 아름다운 영혼의 빛깔이어라

앞세에 이는 바람에도 괴로왔던 당신은  
차라리 차라리 아름다운 생명의  
빛깔이어라

당신의 땅.... 당신의 자리에  
하늘이 나리네 .... 별이 나리네...

尹東柱의詩、またその生と死は、イエスさまの生と死と響きあいながら、わたしの人生の道を  
を照らしてくれます。

あなたの天は どんな光だったので  
あなたの風は どこへ吹いたので

あなたの星は 何を語ったので あなたの詩たち  
は このように息をするのでしょうか

夜通し 苦しんで 夜明けを迎え  
恋しさに傷ついた風が ふるさとに 駆けていく  
とき

あなたは遠い空 あまりに冷たい空気の中で あ  
なたの息を 引き取らねばならなかったのですか  
....

死んでいく すべてのものを 愛したあなたは  
むしろ 美しい魂の光であれ

木の葉に 起こる風にも 苦しんだあなたは む  
しろ むしろ 美しいいのちの光であれ

あなたの地.... あなたの場所に  
天が降る .... 星が降る....